

まほうのつぼ (スウェーデンの昔話)

まつむら ゆうこ 再話

むかし、あるところに、貧しい夫婦がいました。持っているものは牛一頭だけでしたが、とうとうその牛も売らなくてはならなくなりました。

旦那さんが牛を引いて歩いて行くと、ひとりのお爺さんに会いました。

お爺さんは、

「牛を売るのがいい。いくらだね」と尋ねました。

「払えるだけでいいよ」

「それなら、このつぼと交換しよう。きつと気に入るだろう」

旦那さんは、きれいなつぼを持って家に帰りました。



「さあ、出発だ!」

「とつと、行つちまいな」

おかみさんが言ったとたん、つぼはドアから飛び出して行きました。そして城まで行くと、台所の前に座りました。

朝、料理番がやってきてつぼを見つけてました。

「なんてきれいなつぼだ。ちょうどつぼが足りなくて困っていたんだ」

料理番はつぼを台所に運び入れ、肉や魚をやまほど詰め込みました。まんぱいになると、つぼが立ち上がって言いしました。

「さあ、出発だ!」

そのとたん、つぼは走りだして家に戻りました。旦那さんとおかみさんはつぼのなかの食べ物を見ると、牛のことなどすっかり忘れてしまいました。毎日、ふたりはお腹いっぱい食べました。おかみさんがせつせと磨いた

ところがおかみさんは、旦那さんがつぼしか持っていないのを見て怒りだし、つぼを家の隅に捨ててしまいました。その晩、おかみさんは牛のことを思い出して眠れませんでした。するとつぼがこう言うのが聞こえました。

ので、つぼは前よりもぴかぴかになりました。

ある晩、おかみさんはつぼが言うのを聞きました。

「さあ、出発だ!」

「気をつけて行つといいで」と、おかみさんはつぼに言いました。

つぼは出かけて行って城の広間の前に座りました。

召使たちは、美しいつぼを見つけると、磨いた銀の食器をつぼにしまい込みました。まんぱいになると、つぼは立ちあがって言いました。

「さあ、出発だ!」

そのとたん、つぼは走り出して家に戻りました。旦那さんとおかみさんは、つぼのなかの宝を見て腰を抜かしました。ふたりはお金持ちになったのです。



つぼは出かけて行って王様の部屋の前に座りました。召使は美しいつぼを見つけると、王様の部屋に運び入れました。この日、城では盛大な宴会が開かれていました。王様もダンスをしていましたが、急にトイレに行きたくなって大急ぎで部屋に戻りました。そしてつぼを見ると、これはトイレだと思い込んだのです。

王様がつぼにまたがったとたん、つぼは「さあ、出発だ!」と言って、王様をのせてすごい勢いで駆けだしました。そして、家に着くやいなや粉々に割れてしまいました。

王様はあまりの怖さに口もきけないでいましたが、正気に戻ると旦那さんとおかみさんに言いました。

「城に戻るから馬を用意してくれ。それから今夜のことは我々だけの秘密だぞ。黙っていてくれれば立

派な屋敷を建ててやろう」

そして、そのとおりになりました。

こうして、旦那さんとおかみさんは、つぼのおかげで、いつまでも幸せに暮らしました。(おしまい)

しばらくの間、つぼは、テーブルクロスのかかった上等なテーブルのうえでおとなしくしていました。けれども、ある晩、つぼが言いました。

「さあ、出発だ!」